

『被災地から本当の被災地へ』

仙台市 朴沢一成

3月11日の未曾有の大災害から3日目の14日に神奈川の重原先生から、電話が入った。「先生！大丈夫？ご家族は？診療室は？」矢継ぎ早の質問に大丈夫としか答えられずにいると、被災地にボランティアで行きたいと言う。先生の安全が保障できないからやめた方が良く、といっても聞かない重原先生に後押しされるように、私も18日金曜日からご遺体の身元確認のための検視検案に出かけることとなった。

重原先生と安岡さん（重原先生の話に同調してボランティアをかってでた）が、クラブ22の先生方からの救援物資を満載にして、東京を出発して仙台に向かっている頃、仙台の積雪量は10cmを超えて、気温は氷点下3℃だった。明日の朝の最低気温は、氷点下5℃の予報だ。都会の先生、体調崩さねばいいが・・・。

翌朝、8時に指定された宮城県警本部に行くと、江澤敏光先生（宮城県歯科医師会大規模災害対策本部身元確認班班長）が出迎えてくれたがすでにストレスがたまっている顔、手短に福島方式の立体型デンタルチャートの記載方法を教えて下さった。江澤先生はじめ柏崎、駒形先生たちは震災翌日には利府のグランディに入っていて150体以上のご遺体を視ていたらしい。重原先生たちの持ち込んだ救援物資などを警察車両に積み込んだら、我々のスペースはなく、重原先生の車で現地まで向かうことになった。私のアドバイス通り、スタッドレスを購入してくれましたので助かった。マグニチュード9.0と観測史上最大の地震は、各地に大きな爪痕を残していた。石巻に向かう45号線は、あちこちで寸断されているとの噂で我々は、高速道路を使うことにした。その高速道路も橋の手前と向こう端に大きな段差がある。地面が10cm以上沈んでいるのだ。せいぜい時速50kmしか出せない。いつもなら1時間で行ける石巻まで1時間半はかかりそうだ。

8時に県警本部を出発して、9時に到着する予定が、石巻旧青果市場到着は9時30分になった。バスより遅れて着いてはいまいかと、ひやひやしたが、何とかこちらが早かったようだ。現地には石巻歯科医師会の三宅先生がいた。髭をたくわえた優しそうな顔立ちが印象的だった。実は彼も被災者の一人だった。自宅は高台にあったので、無事だったものの、診療室は町中にあるために、津波により冠水していた。「どうせ、仕事も当分できないし、家にいても何もすることないから」とは言うものの、毎日はずらい。

ご遺体の安置所は、思いのほか、室温が低かった。外気温も低い、寒い被災地に置き去りにされていたご遺体は冷たく、避難所におられる方々には辛い寒さも、ご遺体を腐乱から守ってくれていた。

石巻市内の総合体育館は、すでに300体以上のご遺体で満杯になり、次に安置所となったのが、今われわれがいる旧青果市場である。18日の朝の時点ですでに300体を超えていた。（震災2週間後には1000体を超え、3週間後には1500体を超えるご遺体を収容している。）

県警本部で江澤先生から説明を受けたチャートと違うものがあり困ったが、とりあえずスタートせざるを得ない。冷え切ったご遺体は、死後硬直していて口が開かない。スパチ

ユラを差し込み、ゆっくりこじ開け、開口器を入れさらに開ける。早く家族のところに返してあげるから、お願い開いてちょうだい、そう心で叫びながら。

ここ旧青果市場は、コンクリートの床の上で直に検案をしている。時折、警察官に案内されてご家族がみえる。覆われたビニールをめくった途端に、安置所中に響き渡る泣き声、我々の手が止まる瞬間である。間もなく昼休みという時に、我々に割り当てられたご遺体は、2歳ぐらいの女の子。今にもニコッと微笑むような安らかな顔で横たわっている。私の目にも重原先生の目にも涙が溢れ、検案どころではない。せつない、せつない、せつない。東北大学の先生方をお願いしてしまった。

ここ石巻には、我々以外に山形歯科医師会の土門先生率いる精鋭部隊が配属されていた。彼らは、とても手際よく、統率も取れていて心強い限りだった。瞬間に1日は、終わりを告げようとしていた。日中は少し日差しもあり、外に出れば暖かくも感じたのに、4時過ぎには、底冷えがして体が震える。

神奈川から来た重原先生が、ステーションワゴンを二人乗りにして満載してきてくれた援助物資を昼休みに避難所に持って行った際に、三宅先生のご自宅に伺った。ご自宅は、石巻港を見下ろせる高台にあったため、津波に引き続いて起こった火災の難も逃れることができたが、庭から見える眼下の光景はとても悲惨なものでとても説明ができない。崖下の火災現場からは、「たすけて！」という声が、何度も何度も聞こえてそうだが、どうすることもできないご自分が歯がゆく、残念だったに違いない。

家や、仕事やら何もかもを失った上に、このように精神的なダメージが多くあろうかと思う。避難所の皆は、ことのほか元気だ。1000人以上の人が一か所に集まっているのに争う声が全く聞こえない。聞こえるのは、感謝の言葉、ねぎらう言葉ばかり、本当は自分たちが大変なのに、我々に優しい言葉が降りかかる。日本はまだまだいけそうだが、そう強く感じた。

すでに命をつなぐ、援助物資は十分である。これからは今後の生活を支える援助が必要です。的確な言葉が見つかりませんが、お金があれば、というかお金がなければ、大変です。500億円を超える義援金が集まっているそうですが、政府にしても赤十字にしても、いち早く、金銭援助をさしあげるべきです。

被災地に実際に入って見て感じたことを書き綴りましたが、読みづらい文章多々あったかと思えます。この非常事態に免じてお許し下さい。